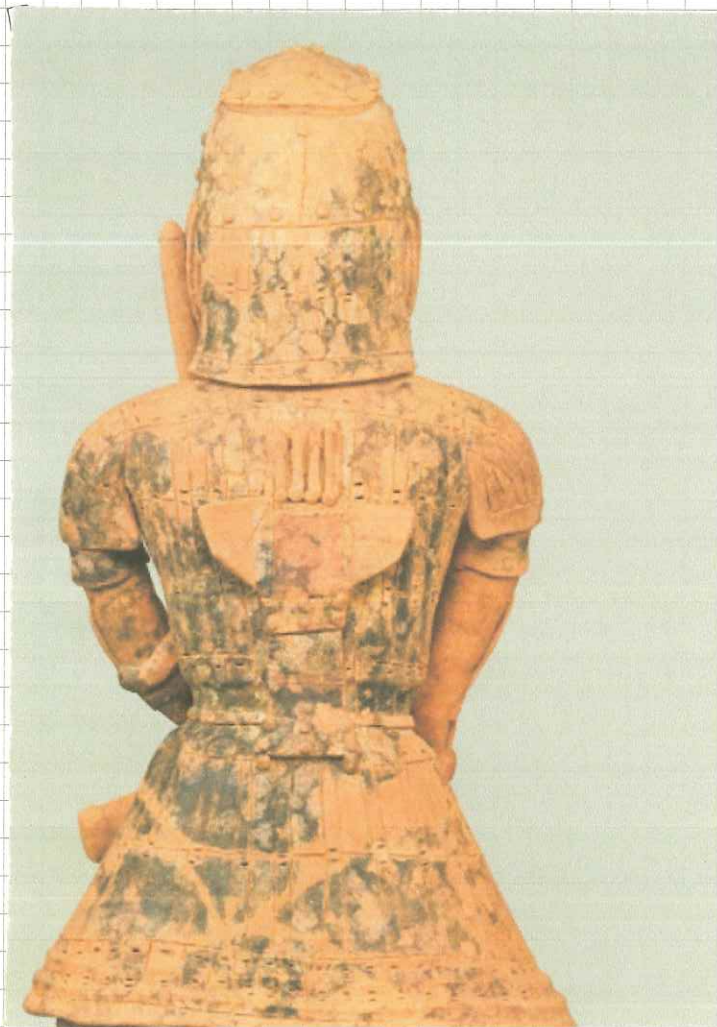


甲冑の歴史と埴輪

～時代によってどう違うのか～



桂萱中学校 2年6組

齋藤 萌衣

〈動機〉私は創道部で、防具も着た時、昔ほどのような甲冑だったのが気になったからです。

〈情報収集〉 インターネット、資料館

〈研究内容〉甲冑の歴史を調べます。

〈予想〉今は、頭、お中、腰あたりを守っているから、昔の甲冑も守っていると思います。

〈研究〉

◎古代の甲冑「^{かんこう}短甲・挂甲」

◦古くは弥生時代の遺跡から短甲(木製)の部分とおぼえしきものが発掘されました。

～古墳時代～ 短甲(おしをかよろい)



◦金属が使用されるようになり、短甲にも金属製のものが見つかりました。また、甲冑の様子を知ることができるものとして、古墳から出土した埴輪で武装した姿のものが見つかっています。

◦短甲…胸を守る丈の短い甲のこと

◦金属製の短甲鉄板同士を接続する

鉄留めの技法

^{ふくり}覆輪の技法

が用いられました。

◦短甲には、腰回りの防衛である草摺(①)、肩から二の腕を守る肩鎧〔後世の袖に当たる〕(②)、腕を守る籠手(③)脚を守る^{あし}膝当などが揃えられるようになり、おおよそ後世で甲冑武装する時の部分が完備し始めています。

← 挂甲

- 古墳時代の遺跡で見られる甲冑に挂甲というものがあります。
- 挂甲… 革や鉄のこぎね小札をかしら革か組で綴じて一枚の板とし、この板を繋いで構成した甲冑

◦ この挂甲には二つの形式がある

- ① 胴全体を巻いて体の前で引き合わせる「胴丸式挂甲」
- ② 貫頭衣のように胴の前後の部分を作り、両脇を塞いだ「柄襦式挂甲」

◦ 挂甲は支配者が着用しました。体に馴染みにくい短甲に比べて、挂甲は体を自由に曲げ伸ばしができる利点があり、奈良時代には高級武人用として用いられました。

◦ 「胴丸式挂甲」は、平安時代末期頃に重用された胴丸の形へと整った、といえます。

一方、「柄襦式挂甲」は、近代に見られる天皇即位の御大典では、近衛の次将が武官のけつせき關脇袍の上に着用している柄襦にその形式が受け継がれています。

◦ 一般兵士には軽くて安価な綿襦甲を用いました。挂甲は製作に手数がわかり大量生産するのは難しい

ためです。綿襦甲は唐風の甲冑で、コート状の布に革などを綴じ付けたもので防寒に優れていたようです。

◦ 短甲と挂甲は平安時代の初期まで用いられていたことが「延喜式」からうかがえるようです。

◦ 短甲と挂甲は金属で作られていたため、重量があり行動に不便、綴る糸や革が損傷しやすいたわ、平安時代初期桓武天皇により鉄か革製の甲冑に切り換えられました。

◦ 革は加工しやすく軽いですが、年月が経つと脆く風化しやすいからです。

◎ この短甲・綿襦甲は村叟、度重なる戦乱によりほとんど現在しません。

↳ 武家階級が経験により改良した大鎧・胴丸へと引き継がれていきます。



↓ 綿襦甲 (綿襦甲冑)



↑ 柄襦式挂甲

～平安時代～ 大鎧、胴丸



大鎧

- 武士階級が台頭した平安時代末期頃、鎧甲や挂甲の形式に改善と改善を重ねた大鎧や胴丸が成立します。
- 大鎧は騎馬戦が主流であった平安時代末期の戦い方に適した鎧でした。馬上で腰から大腿部にかけて四方を取り囲むように草摺を覆う四間草摺(①)、^{フツハリの柄} 弦走草、^{セムツノカ} 桷檜板(2)、^{マウロイ} 鳩尾板などが大鎧の特徴です。
- 胴丸は軽武装用や徒歩武者用に適したものとして生まれました。奈良時代までに使用されていた「胴丸式挂甲」がその発展して成立したものといわれています。
- 草摺の数は初期こそ大鎧と同じ四間草摺でしたが、時代を経るごとに分割し最終的に八間草摺に変化して行きました。これは徒歩武者向きに足捌を良くするためです。



四間草摺



八間草摺

～鎌倉時代～ 大鎧、胴丸、腰巻

- 大鎧は元々馬上での戦いに適した甲冑でしたが、敵と落馬させず戦闘法が広まるにつれて、従来の物より動きやすいもの

が求められるようになりました。機敏に動くためには腰と鎧の重さを支え、両肩に力か子鎧の重さを軽減する必要がありました。そのために胴の幅が従来の裾広がりから上下同幅もしくはやや握すほまりへと



胴丸

形状が変化し、腰に密着するようになり、胴の丈が短く変化するなど、腰と鎧の重量を支える工夫がなされました。

- 鎌倉時代後期の頃、より便利な胴丸が主流になり、大鎧は象徴性が強まりました。金銅の飾りが用いられ、彫金物の装飾が多様になりました。また韋所の文様も変化し平安時代は^{シロ}襷^カ敷、獅子丸などが鎌倉時代では獅子牡丹や牡丹にした。不韋明王三童子像が多く使われました。



大袖付胴丸

腹当・腹巻



↑ 腹巻



↑ 腹当

- 腹当とは、最も簡略化された甲冑です。胸の前部だけを防御する腹当に、その両面をさらに一間分ずつしたものが腹巻です。
- この形状だと背中の際間が多いのですが、武士は敵を前面に受けるのが面目であるため、背中の際間はそれほど意識されていなかったそうです。
- 腹巻もまた胴丸と同様に従歩戦で動きやすい甲冑のため、やがて主流となってきました。

～南北朝時代から室町時代にかけて～

- この頃の戦闘は騎馬戦から徐々に従歩戦に移行していき、この変化に伴い騎馬戦に適した大鎧は実戦において不便になり、やがて権威の象徴的存在となってきました。一方、実戦で主流となったのが胴丸や腹巻です。胴丸は兜・袖・籠手・脛当をつけた重武装となり、腹巻は背中の子き合わせ部分の際間を防御するための背板(股病板)をつけるようになりました。また、小札の長さが短くなり従来の甲冑に比べ胴の丈が10cmほど短くなりました。
- またこの頃の変化として、威し方の簡素化が挙げられます。平安時代以降、^{けみきかどし}毛引威が伝統的に行われていましたが、南北朝時代に入ると^{すかけびし}素懸威という威し方が始まり、室町時代末期からはこの二つの威し方が一般的になりました。その他、小札も変化が表れました。札を半分ずつ重ねるのではなく、札の四分の一程度を合わせる^{しまぢ}伊予札が用いられ、室町時代末期頃には、たくさん的小札を横一列に綴じて一段を作る代わりに、一枚の板で一段とする^{いたぢ}板札が多く用いられるようになりました。変化の結果大幅なゴトトダウンと量産化を可能にしました。
- 南北朝時代から室町前期頃にかけて、腹巻(一部胴丸も)鞆包の技法が行われました。鞆包とは、胸の表面を鞆や^{すけ}蓑で覆い隠す技法で、壊れた甲冑を再利用する工夫でした。

～ 戦国時代 ～ 当世具足



↑ 当世具足に陣羽織をついた武将

○ 戦国時代に入ると、槍・弓を始めとして、新しい兵器である鉄砲が活用されるようになり、これらの武器を用いた戦闘に合わせた部隊と、より頑丈で軽快な動きができる甲冑が必要とされるようになりました。

○ この時代に成立したのが当世具足です。

○ 当世具足と胴丸の異なるところは、^{たて}前立拵三段、後立拵四段、長側五段、各地とも胴丸よりも一段ずつ多いところです。

○ この時代の甲冑には鉄を多用するようになり、板札も鉄を使ったものが多くなりました。何枚もの小札を威して作った胴丸に比べて伸縮しないので、そのままでは着服できません。そのため、胴左体を縦方向に2～3枚の節々に分けて、

蝶番をつけてつなぎ、開閉できるようになりました。

また、鉄の板札でできた胴は鉄留せられているため伸縮しないので、左右の脇が切り上げられています。

○ 胴と草摺をつなぐ^{ゆるみ}捻線は、従来の大鎧、胴丸、腹巻などに比べて長くなっています。これはお刀を差すための紐を捻線のよから隙に巻いても草摺が自由に動くための工夫です。



↑ 朱具足の武将

↳ 鎖具足をついた武将

○ 布地に鎖を綴り付けたもので、古くは鍔腹巻と呼ばれ「八木本平家物語」にあり、胴丸にも見られるが、これは二枚銅の具足で鎖兜(①)も揃っています。

○ 小形も形の鉄板(カルタ鉄)を鎖で連接し屈伸を自由にし、抵抗力を増大しています。



～南蛮貿易～西欧甲冑の影響～

- 南蛮貿易が行われ、西欧の甲冑が日本に輸入されました。この甲冑に一部手を加えて採用したものが南蛮胴具足です。
↓南蛮胴具足

主な南蛮胴具足

- 前後の胴が各一枚の鉄板で作られていること。
- 正面の胴かじ腹にかけて盛り上がり筋状あること。
- 癸手(胴の下端)がV字になっていること。
- 胴の腕の部分などは、日本の甲冑で用いる覆輪を用いず、直接ひねり返して亀目状の文様がつくように叩いて補強していること。

- 南蛮胴は鉄砲の攻撃に対して有効でしたが、金属製のため重量があり、また高価なものでした。そこで南蛮胴を日本人の体型に合う胴が作られるようになりました。日本で作られた南蛮胴は元来の南蛮胴と異なり、癸手がV字ではなく、日本の甲冑と同じく平らです。

- 当世具足は、本小札・伊予札・板札を使い分け、胴の構成も様々なるものを用い、個性を主張しました。

- 朱漆の甲冑が普及したのもこの頃です。→

朱漆の顔料は辰砂(水銀と硫黄の化合物)やバンガラ(酸化鉄)を用いるため高価でしたが、室町時代末期から安土桃山時代にかけて、中国から大量の辰砂が輸入され、甲冑にも朱漆を使えるようになりました。



↑鉄朱漆板短胴取五枚胴具足

～江戸時代～ 太平の世 復古調の鎧

○ 戦のない平和な時代であった江戸時代では、甲冑は実用性よりも、飾りな場合の立派さが重視されるようになり、実用には不便な防具を、立派に見えるからという理由でつけたりしています。また、江戸時代中期以降になると、当世具足以前の大鎧・胴丸・股巻に関心が持たれるようになり、甲冑の復古調の時代となりました。

○ 大鎧、胴丸、股巻と再び作るようになると、古式甲冑の研究が不十分だったため、それぞれの甲冑を特徴付けるあまり事が破られた結果、異様な甲冑が生まれました。

一方、各藩で独自の具足が受け継がれるという例もありました。著名なのは仙台藩伊達家に伝わる重厚な足りの雪の下胴具足、細川家の身動きしやすい簡素な戯中具足、前田家の高度な工芸技術を施した加賀具足などです。

～幕末～ 甲冑の終焉

○ 19世紀後半の幕末、長州藩と薩摩藩を中心に倒幕運動が起こり、再び戦乱の時代となりました。

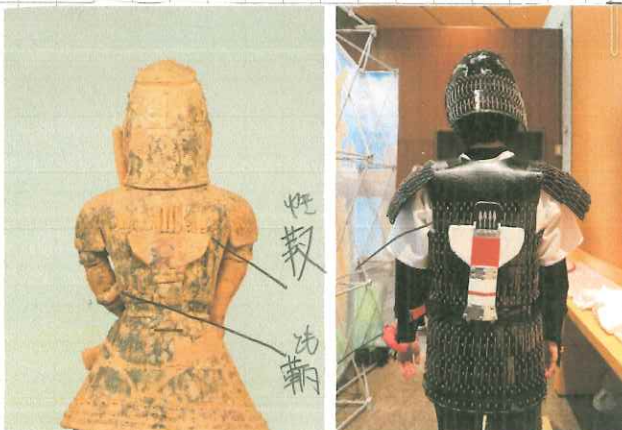
○ この時代の武器の主流はかつての槍や弓・鎌倉ではなく、近代的な銃銃や大砲などに移り、近代の戦闘法に対応できなかった甲冑は幕末の終焉とともにその役割を終えたのです。



～ 塙輦輪 挂甲の武人～

○ 塙輦輪の左手首には、弓を引くときに手首を守る鞆たもとが表されていますが、レプリカに赤い色を造形化させています。

○ 塙輦輪の背中を見てみると、4本の矢が入った鞆たもとを背負っているのがわかります。



<スルドワ-ワ>

調べたことを踏まえ、高崎市がつけの里博物館に行。て武人の埴輪がどのようなものが見てみることにしました。

～ 武人の埴輪～①



- 群馬県太田市飯塚町出土
- 甲冑に身を固め、大刀と弓矢をもつ武人の埴輪です。
- 冑は^{しほくろ}衝角付冑と呼ばれるもので、顔を守る頬当てと後頭部を保護する^{いさ}鍔が付いています。

② 挂甲武人埴輪

- 群馬県湊東村出土
- 冑、挂甲で身を固めている。左手は頸椎大刀(かぶつたさ)の柄を握り、今にも抜かんとする威圧的な仕草を表しています。

②

③



③ 埴輪短甲の武人

- 埼玉県熊谷市上中条出土
- 衝角付冑とみられる冑と、帯金式の短甲も身に着けた武人を表した人物埴輪です。甲冑の黄金と呼ばれる鉄板を沈線・銕(リベット)を粘土粒で表現しています。

④

- 群馬県上野古墳出土
- 製作においては、粘土の紐を螺旋状の輪にしたがって積み上げ、表面を板で整える成形がなされました。
- 両耳の上で髪を束ねた下げ美^{みずる}良も結い、日本列島で伝統的な衝角付冑をかぶっています。



<結果>

- 時代別の甲冑の特徴を知ることができました。
- 埴輪から甲冑の特徴を知ることができました。

<感想>

- 私が付けている防具と比べると、胴とこの共通点があり、甲冑の方がさまざまな種類があることが分かりました。
- 時代によって甲冑にさまざまな特徴があることが分かりました。
私の中では、平安時代の大鎧が気に入りました。

<参考にしたサイト>

- 日本の甲冑 日本服飾史
- 文化財活用センター ①の埴輪 [武人埴輪から再現した体験用甲冑]表紙の裏
- 文化遺産オンライン 「埴輪 鎧甲の武人」(③、④の埴輪)
- メディア鹿馬 鎧甲をつけた男子埴輪 [②の埴輪]